

2024年3月7日

留学報告書

南山大学長

ロバート・キサラ 殿

外国語教育センター

教授 石崎 保明

留学先：University of Edinburgh, School of Philosophy, Psychology & Language Sciences

期間：2022年9月1日～2023年8月31日

目的：英語文法構文の歴史的発達に関する通時的構文文法的考察

留学先：名古屋大学大学院人文学研究科

期間：2023年9月1日～2024年2月29日

目的：英語文法構文の歴史的発達に関する通時的構文文法的考察

報告者が今回の留学で主要な研究対象とした所格交替 (locative alternation) は言語学ではよく知られている現象であるが、これまでの研究では現在話されている言語に焦点が置かれており、少なくとも英語に関してその歴史的発達を扱った研究がほとんど無かった。このような背景のもと、英語における所格交替の歴史的発達を通時的構文文法の観点から明らかにすることを目的として調査・研究を行った。

最初の留学先である英国エディンバラ大学では、通時的構文文法研究をリードしている Graeme Trousdale 教授からの指導を受けるまたとない機会を生かし、個人面談での意見交換を通して構文文法の理論的な側面と方法論について理解を深めた。また、定期的開催される認知言語学の研究会 (Cognitive linguistics seminar) や Trousdale 教授の授業を聴講する機会を得た。その他、同大学で開催され、Croft 教授を含む著名な研究者も登壇した歴史言語学のシンポジウム (The Third AMC Symposium) にも出席した。英国滞在中は理論的な考察に重点を置きつつも、報告者が所格交替の歴史的発達にとって重要な時期と考えている後期近代英語期の言語的、文化的、社会的背景についての調査を行った。上記の研究を遂行するため、ロンドンにある大英図書館にも三度赴いた。

二つ目の留学先となる名古屋大学では、エディンバラ大学での学びをさらに進めるべく、名古屋大学図書館の蔵書を利用しながら、おもに用例の採取・分類に時間を費やした。客員研究員として受け入れていただいた田中智之教授 (名古屋大学人文学研究科) は報告者とは依拠する理論的枠組みが異なるものの、英語の通時的発達の理論的・実証的研究を専門とし

ており、その研究を学ぶとともに、田中教授とその指導大学院生および卒業生等で構成される月一度の研究会にも参加することでさまざまな言語現象の歴史的変化を異なる視点から学ぶことができた。

留学の成果についてであるが、すでに論文の形で1編をとりまとめているが、主要な研究テーマである所格交替の通時的発達の研究は先行研究がきわめて少ないこともあり、国際的な研究動向も見ながら、もう少し時間をかけてモノグラフの形で公表したいと考えている。このような思いもあり、留学期間中に公表した研究成果は口頭発表の1件（研究成果1）のみである。現時点で公表が予定されているものとしては、口頭発表2件（研究成果2および3）と書評論文1編（研究成果4）がある。その他、現在編纂が進められている英語教員や英語学習者を対象とした英語学習シリーズのうちの1冊において本研究に関わる5項目をすでに執筆・提出しており、早ければ今年中に出版される予定である。予定されている発表機会を生かし、研究内容のさらなる充実に向けて取り組んでいきたい。

【研究成果（現時点で公表が予定しているものを含む）】

1. 2023年3月19日 言語変化・変異研究ユニット第10回ワークショップ（共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）共同利用・共同研究課題理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第6回研究会）「発表題目：英語における Spray クラス所格交替動詞の歴史的発達について」（単）（於 オンライン会議室）
2. 2024年3月29日（予定）言語変化・変異研究ユニット第12回ワークショップ（共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）共同利用・共同研究課題理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2023年度第5回研究会シンポジウム）「言語獲得と言語変化の事実・一般化と言語理論、発表題目「(通時的) 構文文法における交替とは？」（単）（於 東京外国語大学）
3. 2024年5月4日（予定）日本英文学会第96回全国大会 発表題目「通時的構文文法理論における交替現象について：英語の所格交替を例に」（招待発表）（単）（於 東北大学）
4. 2024年6月（出版予定）書評：対象著書 Traugott, Elizabeth Closs (2022) *Discourse Structuring Markers in English: A Historical Constructionalist Perspectives on Pragmatics*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins 『近代英語研究』第40号（審査付）。

以上